

『士商叢談便覧』における清末北京語文法の研究  
—《兒女英雄伝》との比較—

楊璇

A Grammatical Study of the Beijing Dialect of the Late Qing  
in *Shishang Congtan Bianlan*:  
Compared with *Ernyingxiongzhuan*

YANG Xuan

要旨

金國璞，字卓菴，北京人，生卒年不詳。1897年金國璞作為高等商業學校附屬外國語學校（現東京外國語大學前身）的一名漢語教師來到日本，工作6年後於1903年歸國。『士商叢談便覧』（上卷1901，下卷1902）是金國璞在日教學期間出版發行的北京官話教科書。『士商叢談便覧』是一本對話體教材，上下卷各50章。本論文通過對比同一時代出版的北京話武俠小說《兒女英雄傳》中的詞彙及語法特徵，並結合周一民的《北京口語語法·詞法卷》及太田辰夫的《北京語歷史文法》，分析探究『士商叢談便覧』中的北京話特點，梳理總結『士商叢談便覧』與《兒女英雄傳》中北京話特點的異同。

キーワード：『士商叢談便覧』 《兒女英雄伝》 北京語文法 北京語語彙 比較

目次

1. 『士商叢談便覧』の言語と《兒女英雄伝》
2. 品詞の比較研究
  - 2.1 「アル化」語
  - 2.2 文末語気助詞
  - 2.3 副詞
  - 2.4 介詞

## 2.5 《北京話詞典》に収録されている語彙

### 3. 文型の比較研究

#### 3.1 「把」構文

##### 3.1.1 処置義

##### 3.1.2 致使義

#### 3.2 受け身文

### 4. 『士商叢談便覽』から見る《兒女英雄伝》との異同及び言語傾向

## 1. 『士商叢談便覽』の言語と《兒女英雄伝》

『士商叢談便覽』は金国璞が東京外国語学校清語科教師としての著作である。全書は1901年に出版された上巻と1902年に出版された下巻の構成となり、上巻と下巻はそれぞれ50章が収録され、合計100章である。各章では短文の形で構成され、ビジネス関係の短文が9個から16個までとなる。

楊鉄錚(2017第2章)により、金国璞、字卓菴、北京出身、生没年不詳。明治30年(1897)に開校した高等商業学校附属東京外国語学校の講師として、日本文部省により招聘され、日本で6年間勤務した。明治36年(1903)に同校講師を辞して帰国した。帰国後、金氏が以前に教えた日本人の生徒達は出資して1903年8月1日に「支那語研究舎」(後に清語同學會に改名)を設立し、金氏はそこで中国語を教え続けた。

六角恒廣(1989)は、金氏について「日本の中国語教育で各方面に尽力した中国人教師である。」(第103頁)、又「平岩道知と共編で『北京官話 談論新篇』をかき、また呉啓太・鄭永邦『官話指南』を改訂するなど、明治後半期の中国語教育に大きな影響をあたえたのみならず、以上の2書を通じて昭和の中国語教育にも影響をおよぼしている。」(第129頁)と指摘している。

《兒女英雄伝》は中国清末期の文康が著した白話文武俠小説、全40回から構成される。馬從善の序によれば、作者の燕北間人こと文康は字を鉄仙といい、満洲八旗の鑲紅旗人の家に生まれ、正確な生没年は未詳である。《兒女英雄伝》が成書したのは作者文康の晩年の頃で、最初は写本として流通していたが、光緒4年(1878年)になって、北京聚珍堂から木活字本で出版された。《兒女英雄伝》の用語について、王静(2010)は“《紅樓夢》面世一百年滿人文康以極純熟地道的北京口語，俚俗民諺寫出了《兒女英雄傳》，這兩部作品被譽為兩部絕好的京語教科書。”(第109頁)と指摘されている。

『士商叢談便覽』の出版時期は《兒女英雄傳》の出版時期より二十数年間の隔りがある。二書とも北京語で書かれ、本論文では二書の北京語の特徴について分析し、それぞれの北京語使用の相違点を解明したいと考えている。

## 2. 品詞の比較研究

用語について、『兒女英雄伝』では、満洲族に関わる語句が多い。藤田益子(2011)は『『兒女英雄伝』は、清代の白話小説の中でも旗人の社会生活に関わる表現が突出して多く、史実に基づいた事件や現実の社会制度に即した実態を極めて精緻に描き出されている。(中略)『兒女英雄伝』の作者文康も満洲鑲紅旗人の家系であり、描かれた主人公公安驥(安公子の本名)の家系も正黄旗漢軍の旗人の家系であることが、使用される言語もさることながら、この小説の描写内容にも極めて大きく関与している。』(第21頁)と指摘されている。『士商叢談便覧』では、満洲族に関わる語句は見当たらない。その理由としては、『兒女英雄伝』の対象は中国国内の一般庶民だが、『士商叢談便覧』の対象は日本にいる中国語の学習者となる。金氏は当時の模範的な北京官話教科書を作るために、満洲族に関わる語句は取り入れなかったと考えられる。

### 2.1 「アル化」語

「アル化」語は北京語に最も重要な言語特徴の一つで、金氏の他の中国語著作と比べてみると『士商叢談便覧』では「アル化」語の種類は決して多くない、使う頻度も高くない。全部で88個。

#### 1) 名詞:

周一民(1998)は「“兒”後綴是名詞的構詞標誌。絕大多數帶“兒”後綴的詞都是名詞。」(第10頁)と指摘されている。『士商叢談便覧』では、名詞の「アル化」が一番多く使われた。名詞の「アル化」語では、以下のように分類できる。

- A. 時間を表す: 時候兒、功夫兒、天天兒、後半天兒、昨兒、明兒個、前兒個
- B. 場所を表す: 地方兒、門口兒、傍邊兒、村莊兒、街面兒、前邊兒、跟前兒、外面兒、隔壁兒
- C. 人を表す: 置主兒、棄主兒、放出兒(貸し手)、借主兒、原告兒、被告兒、地主兒
- D. 物事を表す: 價兒、官面兒、地皮兒、收條兒、各樣兒、面兒、家當兒、書本兒、房架兒、相篇兒(写真)、路數兒、道兒、人緣兒、座兒、客座兒、笑容兒、退身步兒、帳房兒、神情兒、外樣兒、長法兒、人家兒、聲兒、村莊兒、俗語兒、後手兒、價兒、人人兒、錯兒、好年成兒、耍貨兒、實地兒
- 2) 指示代名詞: 那兒、這兒、那邊兒、這樣兒
- 3) 副詞: 有點兒、好好兒、起頭兒、漸漸兒、當面兒、細細兒、天天兒、準準兒、慢慢兒、趁早兒、差不多兒
- 4) 数量詞: 一點兒、一半兒、一塊兒、幾樣兒、一樣兒、兩邊兒、一頭兒、一會兒、一聲兒、一家兒、一分兒、一段兒、件數兒、三股兒
- 5) 動詞: 歇一歇兒、打鳴兒
- 6) 形容詞: 聰聰明明兒、大號兒(大きな)、

王静（2010）は“《兒女英雄傳》使用兒化詞約 5412 個，充分展示了京語強大的表現力，是北京口語呈現出生動、傳神、活潑、風趣的特點。”（第 109 頁）と指摘されている。《兒女英雄傳》は『士商叢談便覽』より使用した「アル化」語の種類が豊富で使用頻度も高いことが分かる。一つの文では複数の「アル化」語を使用した例が沢山ある。例えば：

雖說是沒甚麼模樣兒，絕好的一個熱心腸兒，甚麼叫鬧心眼兒，掉歪他都不會。（第十五回）// 待說書的把紀獻唐的始末原由演說出來，那十三妹的根兒、蒂兒、枝兒、葉兒，自然都明白了。（第十八回）

《兒女英雄傳》では名詞の「アル化」語の使用がかなり多いが、動詞の「アル化」語も豊富である。例えば：玩兒、翻兒、吃兒、叫好兒、湊趣兒など。『士商叢談便覽』に使用された形容詞の重ね方の「アル化」語より多い。例：粗粗兒、薄薄兒、遠遠兒、空空兒、大大方方兒などがある。

《兒女英雄傳》では全書四十数万字で、「アル化」語が 5412 個を使用された。『士商叢談便覽』は 2 万字程度で「アル化」語が 83 個を使用され、『兒女英雄傳』と比べてみると「アル化」語の使用はかなり少ないことが判明できる。その理由として、常春（2010）は「到了清朝，兒化現象更加普遍，其中一個重要的原因就是滿語中有兩個音的使用頻率較高，即舌尖中顫音「r」和舌尖中邊音「l」，隨着滿漢頻繁的接觸交流，旗人學漢語主要是在與漢人接觸的日常生活中模仿漢語，這就不能不把滿語的特點帶到漢語中去，從而更加強化了兒化現象。」（第 35 頁）と指摘された。金氏は北京人として、「アル化」語が勿論周知しているが、中国語を学ぶ日本人の学習者にふさわしい教科書を作る際に、金氏は大量な「アル化」語を取り入れるのではなく、「這兒」、「那兒」、「一點兒」など一般的な「アル化」語を教科書に入れたことが考えられる。金氏の教科書編纂思想は中国語を学ぶ外国の学習者にとって、最も一般的な用語を学ぶことが第一である認識をもっていると推測できる。

## 2.2 文末語気助詞

李姗姗（2014）により、《兒女英雄傳》の文末語気助詞は 2 種類がある。一種類は文言文の語気助詞：「也、乎、矣、者、哉、耳、兮、焉、欤」、全部で 9 個であり、中では「也」と「矣」が使われた頻度が一番高い。もう一種類は現代中国語の語気助詞である。単音節の文末語気助詞は「呢、吧、呀、嗎、啊、咧、麼、哇、來、哪、叻、哩、啵、喂、罷、呵、啦、羅、哪、噓」などがある。二音節の文末語気助詞は「來的、來着、罷咧、罷了、也罷」などがある。

『士商叢談便覽』の文末語気助詞について、金氏の他の著作に比べると使われた文末語気助詞の種類が少ない、使った頻度は下巻より上巻の方が多い。

表 1 からは『士商叢談便覽』では《兒女英雄傳》が使用された文言文の語気助詞は

表1. 『士商叢談便覧』における文末語気助詞の使用回数<sup>1)</sup>

|    | 哪  | 呀 | 麼  | 罷  | 呢  | 啦 | 啊 |
|----|----|---|----|----|----|---|---|
| 上巻 | 45 | 6 | 16 | 15 | 34 | 2 | 6 |
| 下巻 | 41 | 2 | 31 | 13 | 25 | 0 | 6 |

一切現れていないことが分かる。現代中国語文末語気助詞に関して、『士商叢談便覧』より《兒女英雄伝》の方は明らかに種類が豊富で、使う頻度も高い。『士商叢談便覧』に使われた7種類の文末語気助詞は金氏が編纂した別の教科書『北京官話：今古奇観』にも使用された。（楊璇2019、第p125頁）。

楊杏紅（2014）によると、「麼、罷、呀、哪」は明治時代の北京語教科書に大量に使用された（第140-145頁）。出版年代はほぼ同じで、同様に北京語で書かれた『士商叢談便覧』と『兒女英雄伝』だが、文末語気助詞の使用状況は異なる。金氏は文言文の文末語気助詞を一切使われていない、代わりに現代中国語の一般的な文末語気助詞を大量に使用した。金氏は北京官話で普段使う頻度が高い文末語気助詞の中から、7つの文末語気助詞を選んで、外国の中国語学習者に一番ふさわしい北京官話教科書を編纂した。この7つの文末語気助詞は現代北京語にも継承された。

### 2.3 副詞

《兒女英雄伝》と比べると、『士商叢談便覧』では、使われた副詞の種類が少ない。

表2からは《兒女英雄伝》が使われた副詞の種類が豊富で、階層が低い庶民が使う言葉と考えられる。『士商叢談便覧』では、「管保」、「越發」などの口語表現は全くない。その理由としては、《兒女英雄伝》が中国で流通している白話小説であり、対象は一般庶民となる。言葉遣いは口語を中心に書かれて、読みやすいためとなる。『士商叢談便覧』は北京官話教科書として、金氏は学習者に北京語を教える際になるべく北京官話を教える配慮があると思われる。

《兒女英雄伝》では一番使用頻度が高い程度副詞は「深」である。例：況且老翁把你留京，深望你這番鄉試一舉成名（第三回）。太田辰夫『中国語歴史文法』（1958）周

表2. 『兒女英雄伝』と『士商叢談便覧』における副詞使用の比較<sup>2)</sup>

|    | 頂  | 很  | 最  | 深   | 老  | 簡直 | 好不 | 十分 | 敢情 | 越發 | 管保 | 趕緊的 |
|----|----|----|----|-----|----|----|----|----|----|----|----|-----|
| 兒女 | 4  | 72 | 70 | 125 | 10 | 3  | 38 | 17 | 5  | 3  | 28 | 14  |
| 士商 | 13 | 70 | 13 | 1   | 3  | 3  | 0  | 0  | 2  | 0  | 0  | 4   |

<sup>1)</sup> 本表に掲示した《兒女英雄伝》文末語気助詞の使用データは李姍姍（2014）を参考にした。

<sup>2)</sup> 本表に掲示した《兒女英雄伝》副詞の使用データは趙志群（2011）を参考にした。

一民《北京口語語法 詞法卷》(1998)の両書には「深」が程度副詞としての解説が見当たらない。程度副詞「很」、「最」是北京語ではよく使われる事実は二書の使用状況から判断できる。「頂」は金氏の使用頻度が高いものである。

## 2.4 介詞

起点介詞について、太田辰夫(1965)は「起点をあらわす「起」「解」は南では用いない。また「打」も用いることが稀である。南京官話では「從」「由」などを用いる。」(第50頁)と指摘している。

表3. 《兒女英雄伝》と『士商叢談便覽』における介詞使用<sup>3)</sup>

|    | 打  | 趕  | 從   | 由  | 起 | 解 |
|----|----|----|-----|----|---|---|
| 兒女 | 11 | 11 | 559 | 36 | 1 | 0 |
| 士商 | 14 | 30 | 16  | 13 | 4 | 0 |

表3からは《兒女英雄伝》には北京官話教科書がよく使われる6個の介詞について、『士商叢談便覽』より使用する頻度が低いことが分かる。同じ北京語で書かれた著作でも《兒女英雄伝》では「從」の使用が主流で、他の介詞より使う頻度は明らかに高いが、『士商叢談便覽』では「趕」の使用が一番多い。

### a. 「打」

《兒女英雄伝》では、「打」の用例は11例。中では場所の起点を表す用例は8例、時間の起点を表す用例は2例、方向の起点を表す用例は1例となる。

場所の起点：到了那裡，打鄧家莊兒頭裡過去，就是青雲堡。(第十四回)

時間の起点：從半夜里就打這件事，打真正他就起來了。(第三十五回)

方向の起点：這可是日頭打西出來了。(第三十三回)

『士商叢談便覽』では「打」を使用した例は合計14例。全て場所の開始として使われた。

如今若問我那一路上打那兒到那兒是多遠，我全都不記得了。(第三章)

打天津往這麼來的輪船，所過的各口岸總不免有上貨卸貨的事情。(第六章)

### b. 「趕」

《兒女英雄伝》では、「趕」の用例は11例。張美蘭(2007)の北京官話教科書の「北京口語詞」第52条は「趕」を「等」の意味とする。例えば、趕他死了，我說這還守個甚麼勁兒呢？(第七回) // 下欠的奴才也催過他們，趕明年麥秋準交。(第三十六回)

『士商叢談便覽』では「趕」を使用した例は合計30例。例：趕平安之後，那地方兒

<sup>3)</sup> 本表に掲示した《兒女英雄伝》介詞の使用データは韓璇(2011)を参考にした。



的買賣一定可以振興的。(第五章) // 趕您多嚟要走的時侯咱們再算帳。(第十五章)

c. 「從」

《兒女英雄伝》では、韓璇(2011)によると「從」の用例は559個、時間の起点を表す用例は63例、残った496例は全て場所の起点を表す用例である。

時間の起点：從第二日起，他便催着舊太太動手。(第二十四回)

場所の起点：他何嘗用從門裡走？(緣起回首)

『士商叢談便覽』では、「從」の用例が16個、《兒女英雄伝》よりかなり少ない。全て場所の起点を表す用例である。例えば：所有見天從國外來的電報，都是他先繙譯出漢文來，然後再經別人潤色。(第七章)

d. 「由」

《兒女英雄伝》では、「由」の用例は36個、全て場所の起点を表す用例である。例えば：卻說那河台一面委員摘去安老爺的印信，一面拜發折子，由馬上飛遞而來，不過五六天就得見面。(第三回) 『士商叢談便覽』では、「由」の用例が13個。

e. 「起」

《兒女英雄伝》では、「起」の用例は1個しかない。時間の起点を表す。起那天，這城隍廟爺就靈起來了。(第二十二回)。『士商叢談便覽』では「起」の用例は4個、すべて場所の起点を表す。

f. 「解」

『士商叢談便覽』と『兒女英雄伝』では両方とも「解」の用例が見当たらなかった。

### 3. 文型の比較研究

#### 3.1 「把」構文

##### 3.1.1 処置義

藤田益子(2014)は「典型的処置義の意味は例えば「S + 把 + VC」という構文に基づいて示すなら、「S」がNに対してVという動作行為を行う(それにより何らかの影響がNに対して及び、Cという状態が発生する)」というものである。…この場合、Vは「他動詞」であり、Nは「受事」(受け手)であり、かつVはNに対する処置である。」(第13頁-14頁)と指摘されている。

『士商叢談便覽』ではこのような典型的な処置義の「把」構文が大量に使用されている。文型によって2種類分類できる。

##### ① 「把」 + 「O」 + 「VP」

「把」 + 「O」 + 「VP」の処置文は一般的な処置句である。太田辰夫(1958)は「普通の處置句はこのように2個の賓語をとらず、動詞の後には補語または助動詞がくるか、または動詞を重複使用する。この種の處置句は古代語にはなく、唐代から用いられた。」(第260頁)と指摘している。『士商叢談便覽』の用例は以下に挙げる。

我想你先把這事情的所以然告訴他。(第十一章) // 把自己的事全耽擱了沒辦。(第四十二章) // 你把這封信交給他。(第四十六章) // 咱們先找個地方,把肚子治飽了。(第五十五章) // 等着把這個貨物都發完了之後。(第五十九章) // 他總沒把心術安正了。(第七十章) // 這纔把大家洗出來了。(第六十三章) // 你把他告下來了。(第六十章) // 有人說你暗中把他找了去了。(第八十四章) // 他就把主使的人供出來了。(第八十四章) // 門衛把他傳了去了。(第八十四章) // 就把他放了去了。// 這纔把大家洗出來了。(第六十三章) // 誰把誰告下來了也不知道是為什麼事情。(第八十二章) // 就硬把他那輛車拉過來。(第八十六章) // 我剛纔把他們掌櫃的找過來了。(第八十七章) // 你告訴趕車的,把他送下就趕緊的把車趕回來。// 把他拉出老遠的去。(第七十七章) // 他還能把我的命要了麼。(第八十四章) // 就硬把我的馬拉了去騎呢。(第八十六章) // 請您把這個職名,給遞上去。(第七十三章)

② 「把」 + 「O<sub>1</sub>」 + 「V」 + 「O<sub>2</sub>」

「把」 + 「O<sub>1</sub>」 + 「V」 + 「O<sub>2</sub>」の処置句は①と異なり、2個の賓語をとる。「O<sub>1</sub>」はある動作の影響で「O<sub>2</sub>」の所に移動したという意味になる。用例として、

昨天他把那事情的始末根由都告訴我說了。(第八十四章) // 請您把這裡頭的幾層難處,要細細兒的告訴那位前路朋友說。(第五十七章) // 我把您那天告訴我的話,我已經都轉達前路了。(第五十九章)

3.1.2 致使義

藤田益子(2014)により、もう一種類の「把」 + 「O」 + 「VP」の文型では、NがVの「施事、当事」(動作主、当事者)であり、例え“把”を削除した場合でも、N + VPという「施事主語句」(動作主主語)、又は「当事主語句」(当事者主語句)として文が成立する、この条件にかなう文は致使義となる。

『士商叢談便覽』では、このような致使義を持つ例文は1つしか見当たらない。

就為貪這麼三二千兩銀的利,把身家性命都得下在裡頭。(第六十五章)

『士商叢談便覽』では、処置義を持つ「把」構文の用例が突出し、全部で28個である。それに対して、致使義を持つ「把」構文の用例は一つしか無い。《兒女英雄伝》では処置義の「把」構文と致使義の「把」構文が両方とも大量に使用された。それだけでなく、藤田益子(2006)により、もう一種類の「把個」構文も使用された。

「把個」構文は「把」構文の「把」の後ろに数量詞「個」を伴う場合である。この構文は《兒女英雄伝》には使用された頻度が高く、現代中国語では既に見られなくなった用法も確認された。

把個公子急的不住的問:“嬖嬖爹,他不來可怎麼好呢?” // 倒把個公子臊了個滿臉緋紅。// 把個公子應酬得沒些空閒。// 把個公子就同泥塑一般塑在那裡。



### 3.2 受け身文

藤田益子(2009)は「『兒女英雄伝』にみられる受動を表す“被”構文は175例ある。(中略)『兒女英雄伝』における受動のマーカ―として、最も多く使用されているのが“被”である。」(第76頁)と指摘されている。

『士商叢談便覧』では受け身文で「被」を用いた用例は2つしかない：有我們一個朋友的鋪子裡被偷了。(第七十七章) // 那條街上一連兩夜都有三家被劫的。(第七十七章)。何れも「被」の後に単独の動詞が来る用例である。『兒女英雄伝』より『士商叢談便覧』の用例は極めて少ない、『士商叢談便覧』では受け身文より「把」構文を用いる方が主流だと考えられる。

また金氏が編纂した別の中国語教科書『北京官話：今古奇観』に使用された受け身文なら「被」より「叫」の用例が多い。あえて、金氏は受け身文を作る際に「被」を使用することが主流でないことが分かる。

### 4. 『士商叢談便覧』から見る《兒女英雄伝》との異同と言語傾向

《兒女英雄伝》は同治(1862-1874)時代に完成し、光緒四年(1878)に初めて出版された。『士商叢談便覧』(上巻1901、下巻1902)との出版年は年代の差があるとともに、上文に分析した二書の言語使用について、大きな違いが見える。

用語の選択について、金氏と《兒女英雄伝》の作者文康は二人とも北京出身だが、文康は満洲鑲紅旗人の家系であり、《兒女英雄伝》は小説として生まれて、満洲族に関わる語句が沢山ある。金氏は中国語教科書を編纂する際に満洲族に関わる語句を多く使用しなかった。北京官話の教科書は官話の知識を教えるのが第一であり、満洲族に関わる言語要素を適切に避けたとうかがえる。

《兒女英雄伝》の用語では文言文用語と北京語用語2種類に分けられる。例えば文末語気助詞の中に、「也」、「乎」、「矣」、「者」などは文言文用語だが、「哪」、「呀」、「啊」、「呢」などは北京語でも、現代中国語でもよく使われる用語である。又、《兒女英雄伝》は小説であり、品詞によって、用語の種類が豊かであり、例えば副詞では、「甚、十分、越發、管保」など多くの用語があり、本書がよく口語を反映している。

《兒女英雄伝》と比べてみると、『士商叢談便覧』の用語は決して豊富ではない。『士商叢談便覧』では《兒女英雄伝》に使われた文言文用語は一切書かれていない。その理由とは、『士商叢談便覧』は日本人の学習者が使う中国語教科書である。教科書では中国語の一般的な用語を学ぶため作られたものであり、個性的な文章でないから、口語又は特色がある語は敬遠された。副詞の場合、『兒女英雄伝』では「甚」、「好不」など文言文の程度副詞、『士商叢談便覧』では見当たらなかった。

一方で、『士商叢談便覧』が使用された北京語は《兒女英雄伝》の用語に殆ど含まれている。両書共に使われた北京語がほぼ一致することが分かった。ただし、主流と

して使われた用語が若干違う。例えば、介詞の場合、《儿女英雄伝》では「從」の使用例が一番多い、『士商叢談便覽』では「打」「從」と「趕」の使用が主流である。特に文型に関して、『士商叢談便覽』では、「把」構文の処置義の使用が突出で、《儿女英雄伝》では処置義と致使義両方の使用例がある。更に、《儿女英雄伝》より『士商叢談便覽』の受け身文の使用が極めて少ない。同じ北京語で書かれた著作だが、使用した用語と文型はそれぞれ相違点がある点について検証したが、その原因については、更なる解明が必要である。本論文が研究範囲にしていない両書における語彙の全般的使用、あるいは北京語語彙の全分布などの調査分析は今後の課題として、研究を続けたいと思う。

### 参考文献

- 金国璞 1901『士商叢談便覽』上巻 文求堂書店  
金国璞 1902『士商叢談便覽』下巻 文求堂書店  
清 文康 1996《儿女英雄伝》新疆人民出版社 新世紀出版社新版  
太田辰夫 1958『中国語歴史文法』江南書店  
——— 1965「北京語の文法特點」『中国研究：経済・文学・語学 久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念』久重福三郎先生坂本一郎先生還暦記念行事準備委員会編  
六角恒廣 1988『中国語教育史の研究』東方書店  
——— 1989『中国語教育史論考』不二出版  
周一民 1998《北京口語語法》(詞法卷) 語文出版社  
藤田益子 2006《关于在〈儿女英雄传〉中出现的“把”字句——“把”的宾语带量词“个”》新潟大学国際センター紀要 第2号 p95-p117  
——— 2009『「儿女英雄伝」における“被”構文——「敦煌變文」、「紅樓夢」との対照による考察』環日本海研究年報 第16号 p76-p106  
——— 2011『清代の旗人、満州族に関わる語句について——「儿女英雄伝」からの考察』新潟大学国際センター紀要 第7号 p20-p66  
——— 2014『近代漢語における構文の機能義——「儿女英雄伝」からのアプローチ』新潟大学国際センター紀要 第10号 p11-p32  
張美蘭 2007《明治期間日本漢語教科書中の北京話口語詞》南京師範大學文學院學報 6月第2期 p146-p167  
楊杏紅 2014《東亞漢語史書系日本明治時期北京官話課本語法研究》廈門大學出版社  
高艾民、傅民 2013《北京話詞典》中華書局  
王静 2010《〈儿女英雄传〉儿化词浅析》安庆师范学院学报(社会科学版) 第29卷第4期 p109-p113  
常春 2010《〈儿女英雄传〉称谓词中的“子”尾和“儿”缀》语言文学研究 文教资料 2010年4月号中旬刊 p34-p35

赵志群 2011《儿女英雄传副词浅析》宁波大学硕士专业学位论文

韩璇 2011《儿女英雄传介词研究》浙江师范大学硕士学位论文

李姗姗 2014《儿女英雄传的语气词研究》黑龙江大学硕士研究生学位论文

楊鐵錚 2017「明治期中国語教育における伝統継承と近代化：金国璞、張廷彦と『官話指南』を中心として」東京学芸大学博士論文

楊璇 2019《〈北京官話今古奇觀〉對於〈今古奇觀〉所作字句增刪之研究》大東文化大学 語学教育研究論叢第36号 p123-p142